

Abstract

「日米防衛協力のための指針」からみた同盟関係―「指針」の役割の変化を中心として

徳地 秀士（政策研究大学院大学 シニアフェロー）

この論文は、冷戦期に策定された最初の「日米防衛協力のための指針」、冷戦終結を受けて改定された第二の「指針」及びグローバル化の進んだ今日の国際環境を受けて再改定された今の「指針」のそれぞれについて、その経緯、役割等を比較考察するとともに、米軍再編協議の中で行われた日米間の役割・任務・能力の検討も「指針」を補完するものとして一連の流れの中に位置づけることにより、日米同盟の抑止力強化の歴史について考察するものである。

最初の「指針」には、日米の緊急事態対処計画の作業の枠組み及び日本の緊急事態対処体制の構築の触媒としての役割があり、第二の「指針」にはこれに日本の周辺諸国に対する戦略的コミュニケーションの手段という役割が加わり、今の「指針」には更に、日米防衛協力の全体像の提示及び日米以外のパートナーとの協力関係の方向性を示すという役割が付加されたことを明らかにしている。

『国際安全保障』第44巻第1号（2016年6月）10–29 ページ。